

平成 23 年 4 月 25 日

東日本大震災・薬剤師ボランティア活動報告

市立秋田総合病院 薬剤部

安場 俊行

派遣期間：平成 23 年 4 月 10 日（日）～4 月 16 日（土）

派遣場所：岩手県立大船渡病院（岩手県医療局より派遣場所の指定）

主な業務：院内調剤業務全般、入院時持参薬鑑別業務、避難所での薬相談窓口業務

移動手段：自家用車

ルート：東日本大震災レポート 第 13 報 参照

当院から継続して県立大船渡病院へと派遣されることとなり、第一陣、第二陣に続き、支援活動に従事してきたので報告する。

震災直後は院内処方にて対応していたものの、派遣された期間においては、内科以外の処方ほぼ院外処方へとシフトしてきており、調剤業務に関しては少しずつ落ち着いてきている印象を受けた。同時期に外部から派遣された薬剤師は岡山大 3 名（岩手県遠野市を拠点に 3 泊 4 日で交代）、石切病院 1 名、神谷病院 1 名であり、こと調剤業務に関しては十分人手があったと言える。しかしながら、依然として余震が続き夜も眠れないなど、スタッフの心労は計り知れないものがあると思われた。

調剤については、調剤内規を予め読み、補足すべき点を前任者から申し送りを受けたことや、調剤支援システムが当院と同じユヤマであったことで問題なく従事できた。また、院内処方箋に医薬品の棚番が記載されていたこともスムーズに業務を行えた要因であったと思われる。

また、派遣後半には岩手県薬剤師会の方々や青森から応援にきた薬剤師らと一緒に大船渡市の避難所で支援活動を行った。いくつかある避難所の中で、蛸ノ浦にある避難所にて薬についての相談窓口を開設し、現在の健康面での訴えを聞き、持参した市販薬の中からその対処薬として適するものを提供した。また、日頃服用している薬がある患者については、薬がなくなりそうであれば受診を促すなどしたが、自宅が流されたことによる経済的理由から受診を控えている方も多く見受けられ、被災者であれば医療費が免除されることを伝えるなど、情報提供が重要であったように思う。避難所が点在していることにより、行政からの情報や支援物資などに偏りがある現状を実感した。

全体を通じて感じたことは、長期的な支援も重要だが、このような災害時においては迅速な支援が必要であるということである。全てのスタッフが口を揃えて震災後 1～2 週間が大変だった、と訴えている。自身も被災者でありながら日常業務もこなさなければならなかったことは想像を絶するほどの過酷さであっただろう。近年は医薬分業により院外処方箋化が進んでいるが、今回のような事態の場合病院の業務量が激増してしまうため、地域

薬剤師会などでの協力体制の構築が必要であると感じられた。

また、病院避難所へは医師、看護師が入ることは多々あろうが、やはり薬剤師の力も重要であると感じられた。診療科によって使用する薬剤は異なり、施設によっても採用している薬剤は異なる。昨今では後発医薬品の増加により名称も複雑であるため、慢性期になればなるほど、薬の専門家の存在が重要となってくると考える。チーム医療における薬剤師の重要性を改めて見直すべきなのではないかと感じた。

今回の派遣において、大船渡市、陸前高田市の現状を実際に目の当たりにし、改めて今回の震災による被害の大きさを痛感した。復興には20年以上かかると言われているが、それ以上の時間を要するような印象を受けた。状況は刻一刻と変化しており、柔軟な対応が必要であるが、継続した支援が必要であり、微力ながら助力したいと切に思う。

最後に、工藤科長をはじめ大船渡病院のスタッフの皆様、金野先生並びに岩手県薬剤師会の方々、派遣期間中ともに支援活動を行った方々に、このような状況下で大変お気遣いいただいたことに、この場を借りて深く感謝を申し上げます。